

コロナ治療で…薬足りない

新型コロナウイルスの感染拡大で、治療に欠かせない薬も不足が深刻だ。自宅療養患者が使うステロイド薬は入手が難しくなり、厚生労働省が通知を出す事態に。血が固まるのを防ぐ薬も使用が急拡大し、流産リスクが高い妊婦の治療への影響が心配されている。

自宅療養中の錠剤 国が通知

厚生省は8月27日に全国の病院や薬局、卸業者向けに出した通知の中で、ステロイド薬デキサメタゾンの買い込みを「厳に控える」という呼びかけた。新型コロナで肺炎が悪化して「中等症Ⅱ」となり、自宅療養を続ける人が錠剤を服用する。服用が早すぎるとかえって症状が悪化する恐れもあるが、過剰な免疫による臓器へのダメージを抑えるとして承認されている薬だ。

コロナ治療に詳しいりんくう総合医療センター(大阪府泉佐野市)の倭正也・感染症センター長は「適正に使用は、自宅療養で頼りになる唯一の薬。入手できない事態は困る」と話す。国内で唯一デキサメタゾンの錠剤を製造する日医工

(富山市)によると、同月中旬、2日ほどの間に月間

血栓予防薬 不育症治療に影響

コロナで重篤化をもたらす血栓(血のかたまり)を防ぐ薬「ヘパリン」も一部の製剤が不足している。

持田製薬(東京)は同月24日、同社が販売する「ヘパリンカルシウム」の出荷を調整すると発表した。コロナの治療現場での使用が急増しているという。

この影響が出かねないのが、流産や死産を繰り返す「不育症」の妊婦だ。

国内で約140万人が該当するとされ、中でも血栓リスクが高い妊婦は、自宅で毎日2回、ヘパリンカルシウムを自己注射する。胎

出荷量に相当する注文が集中。その後も多数の注文が続き、「今はすべてにこたえられていない状況」(担当者)という。同月31日には厚生省の新しいコロナ診療指針が発表され、症状の急変に備えて、自宅療養者に早めに渡せることも明記された。さらに需要が増える可能性がある。

盤の周りに血栓ができて胎児に栄養が行かなくなることを防ぐためだ。

コロナと不育症をいづれも治療する岡山大学病院によると、9月の納入量は通常月の約2500本から1400本にほぼ半減する見通し。コロナ治療は点滴のヘパリンで代替できるが、不育症では薬をもらえない人が出る恐れがあるという。岡山大の中塚幹也教授(産婦人科)は「感染の急拡大は他の病気で困る人も影響が及ぶ。感染防止に協力してほしい」と話す。

(矢田文、竹野内崇宏)